



図3. すべりやすさによる分類

## 卒業論文「動詞「ナル」の分析」要旨

堀場 千鶴子

### I. はじめに

「ナル」という動詞を中心に、他の要素間にどのような関係が存在し、文がなり立っているのかを調べようと思う。

### II. 「場所理論」をめぐる

場所理論の延長に立って、池上(1977)では、〈変化〉と〈状態〉という対立する項目を立てて言語の分析を行なっている。〈変化〉とは、「太郎ハ駅へ行く」などのような表現で、X(変化の主体)→Y(到着点)というように抽象化できる。また〈状態〉とは、「太郎ハ部屋ニイル」などのような表現で、X>Yというように抽象化することができる。さらに、以上の二項目においてそれぞれを構成する三つの要素が〈具体〉であるか、〈抽象〉であるかによって分類し、実際には、用いられる可能性のまったくないものをのぞくと以下のような五通りの場合がある。

X	Y	→>
1) 具体	具体	具体
2) 具体	具体	抽象
3) 具体	抽象	抽象
4) 抽象	具体	抽象
5) 抽象	抽象	抽象

まずこれにそって、「ナル」と、やはり変化を表わす動詞である「カワル」を考えてみたところ、これらの動詞は、3), 4), 5)の形をとることが明らかになった。

### III. 「ナル」, 他の語彙との比較

「ナル」に該当する英語表現には、どのようなものがあるか、また「カワル」と「ナル」を比較してみることにより、「ナル」のもつ問題点をさがした。

### IV. 「ナル」における〈X〉, 〈-Y〉, 〈+Y〉

〈X〉とは変化の主体, 〈-Y〉とは変化の出発点,

〈+Y〉とは変化の到着点である。それらがどのような関係にあるかをIIIをもとにして分析した。次のような結果になった。

#### 1. 〈X〉∩〈-Y〉, 〈X〉∩〈+Y〉

〈X〉の下位語である〈-Y〉〈+Y〉により〈X〉の変化をあらわす。

#### 2. 〈X〉と〈-Y〉〈+Y〉とを入れかえられる。

〈X〉または〈-Y〉〈+Y〉を前提とし、はじめて対応関係が成り立つ。その対応するものの変化。

#### 3a. 〈-Y〉を特に必要としない。〈+Y〉は〈X〉の下位語ではないが、〈X〉の上位語の下位語である。

〈X〉が〈+Y〉という状態をもつようになったことを表わす。

#### 3b. 〈-Y〉を特に必要としない。〈X〉と〈+Y〉との間に特別な関係はない。

〈X〉が〈+Y〉という状態をもつようになったことを表わす。

### V. 「…ニナル」の分類

IVの分析をもとに、石綿(1972)を資料として、実際に用いられている「ナル」の例文の分類を行なった。一部をあげておこう。

#### 1. 明るい世の中になる。

不快指数も「全員不快」の81になった。青になった信号灯2。

#### 2. 権力をねらう肉親争いなどがテーマになっている。

足首の白がシンプルなアクセントになっている。台湾が一番札になったといわれる。

#### 3a. 一躍国際的英雄になった。

使い方によっては発がん剤になる。その作品がすでに現代の古典になっている。

#### 3b. 50歳くらいの男が心身黒こげになって死んでいた。

孫が病気になった。道路の右端を一列になって気をつけて歩いた。

実際に分類を行なっていくと、以上の項目のいずれにも属さないものが出てきた。

#### 4. 特に〈X〉にあたる部分はない。事柄が漠然と〈+Y〉であることをあらわす。

例文/最悪の事態になった場合。

#### 5. 事柄が〈+Y〉であることをあらわす。事柄に相当する〈X〉が存在する。〈X〉〈+Y〉は該当関係をあらわしているが入れかえはできない。

例文/復旧は8日夜半になる見込み。

## VI. まとめ

「ナル」における〈X〉と〈-Y〉〈+Y〉との関係の多様性および〈+Y〉の重要性が確認できた。

### 参考文献

- 池上嘉彦 (1977) 「「する」と「なる」の言語学4」『言語』1977. 12
- 石綿敏雄 (1972) 「助詞「に」を含む動詞句の構造」『電子計算機による国語研究Ⅳ』国立国語研究所

## 修士論文「福井県若狭地方方言の言語地理学的研究」要旨

加藤和夫

(付属資料:『若狭地方方言地図』)

内容は大きく5つの章より構成される。

まず冒頭で「1. 研究の目的」を述べ、「2. 調査地域について」では、従来の方言区画の立場から若狭地方方言の位置を概観し、さらに言語外情報を、「地理的条件」と「地域史概略」の2つに分けて略述した。また、「3. 調査と言語地図の作成」では、本稿の基礎資料としている『若狭地方方言地図』作成にあたっての「調査方法」「調査項目」「調査時期と地点一項目により111地点のもの」と181地点のもの—および話者「言語地図の作成について」を具体的に述べた。

ここまでが序論で、本論は、内容的に大きく2つの章より成る。

前半の「4. 若狭地方方言の言語地理学(1)—言語地図から言語史へ—」では、いわゆる従来の言語地理学学説に基づいたところの、言語地図の解釈を中心としたもので、解釈の深化と妥当性をめざしたものである。ただ、「4. 2 語法の分布と解釈」においては語詞の分布に見られるような地域差は多くの場合期待できず、「指定・断定の助動詞「ジャ」の分布」などでは、分布の実態報告という面がやや強くなっている。

まず、「4. 1 語詞の分布と解釈」のうち、「とうもろこし」と「とうがらし」における namban, 「もみがら」と「ぬか」における .nuka の分布については、特に、同音衝突とその回避現象に注目しての解釈である。

「桑の実」「ものもらい」「つらら」「つむじ」の分布については、各々に解釈を施す過程で、「方言圏論の適用の限界」について述べた。

「かめ虫」の分布については、その俚言分布の背景

にある「かめ虫をつかむ時、臭くないようにするまじない」の分布を解釈の手がかりとして、d3oromufi. ogamufi 等の命名動機とそれらの歴史的新古関係を明らかにした。

「螢とり歌」の分布と解釈は、過去に研究報告のある「鳥追い歌」の場合と同様、詞章の分布に言語地理学的解釈を加えたものである。若狭地方の「螢とり歌」の場合、特に第一節の詞章を中心に歴史の変遷の跡をたどることができる。

「親族呼称」の分布については、父親と母親の呼称を中心に、若狭地方の一般家庭で行なわれたであろう呼称の変遷を明らかにした。そして、「兄の呼称」を除いた「祖父」「祖母」「姉」の呼称が、「父親」「母親」の呼称と類似の分布パターンを示すことから、それらの呼称がひとつの語彙体系として変遷してきたことを推定した。

次に、「4. 2 語法の分布と解釈」では、「受身・可能表現」の分布で、受身・可能の助動詞の歴史的新古関係を推定するとともに、可能表現については、本来能力可能表現であると考えられる「jo:~」という形式、また、全国的にも全く例を見ず、従来殆ど報告のなかった「~karaheh」類(能力可能)の存在を、その新古関係とともに報告・考察した。

「指定・断定の助動詞「ジャ」の分布」では、従来、若狭地方にも分布するとされていた「ジャ」を言語地図の形で報告し、いくつかの異なった表現—「ジャ」の前接形式の違いによる—における「ジャ」の現われ具合から、老年層での「ジャ」から「ヤ」への交替を総合図の上で示した。

また、「打消の助動詞」の分布と解釈では、~n> ~fen (~jafen)> ~hen の変遷の跡を、「敬語助動詞」の分布と解釈では、~nasaru> ~narw, ~jarw (~jafjarw)> ~nsu (~jansu) の歴史的新古関係を明らかにした。

一方、後半の「5. 若狭地方方言の言語地理学(2)—分布パターンと方言伝播地理学—」では、いわゆる京言葉を中心としたかつての中央語や、周辺部の言語勢力が、若狭地方に、どのような伝播経路で及んでいるかを、まず分布パターンで整理し、それに言語地理学的解釈を加え、さらに伝播パターンとして大きく3つに分けた。

1つは、「小浜を中心とした波状伝播型」、これをさらに「若狭広域型」と「若狭中央部型」に分ける。残り2つは、「西部侵入伝播型」と「東部侵入伝播型」で、前者はさらに「高浜・大飯型」「名田庄型」「西部